

結・たより, Vol.4,5

発行:神戸:ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1996.4.30. - 24p

請求記号:震災-6-z26

元気アップ自立活動支援事業

第3回 ユイ・フォーラム

女性たちの発言 住まい・暮らし・地域

震災から10カ月近くがたとうとしています。震災からの復興は私たちにとっては安らぎ、支え合える住まい・暮らし・地域を作っていくことです。被災地の中で生活しながら、思ったこと、考えたことを女性の立場から発言していきたいと思います。

第1部 パネルディスカッション

パネラー 石東 直子（都市プランナー 石東都市・環境研究室）
大崎 洋子（女たちの会社「ポレポレ」代表）
弘本 由香里（大阪ガスエネルギー・文化研究所研究員）

コーディネーター 中川 俱子（建築家 「ユイ」運営スタッフ）

第2部 ワークショップ

テーマ	(1) 住まいと人.....	コメンテーター	弘本 由香里
	(2) 地域と人.....	〃	渡辺 和美
	(3) 暮らしを支え合うネットワーク.....	〃	大崎 洋子
	(4) 住まいへの提案、コレクティブ・ハウス...	〃	石東 直子
	(5) 人の間を育てる情報.....	〃	尼川 洋子

日 時： 12月2日（土）午後1：30～4：30
（1：15開場）

場 所： 神戸市生活学習センター
神戸市中央区橘通3-4-3 電話（078）361-6977

参加費： 500円

主催：ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」

連絡先 〒658 神戸市東灘区御影町御影字篠坪1383-1 「アルプラン」内 Fax：(078) 822-4141
[地図あり 省略]

第3回ユイ・フォーラム報告

昨年12月2日、神戸市生活学習センターで、第3回ユイ・フォーラム「女性たちの発言住まい・暮らし・地域」を開きました。

震災から十カ月が経ち、街のハード面が「復興」していく中、私たちの住まいや暮らしが一向に立ち直らないことへの怒りを込めたテーマ設定でした。第1部はユイの運営スタッフである建築家の中川俱子さんをコーディネーターにパネルディスカッションを行い、第2部では5つのワークショップグループに分かれて議論を深めました。

夕方からは、会場をチサンホテルに移してちょっと早めのクリスマスも兼ねた「元気の出るパーティー」も。師走の忙しい中にもかかわらず、どちらも50人近い参加者を得て、大いに盛り上がりました。

〔第1部 パネリスト〕

石東 直子さん

都市プランナー。第1回ユイフォーラムでも講師を務めていただきました。

大崎 洋子さん

女たちの会社「ポレポレ」代表。女性の社会参加と地域福祉を結びつける実践をなさっています。

弘本 由香里さん

大阪ガスエネルギー・文化研究所研究員。自らも宝塚で被災、住まいと人間との関係を研究中。





ユイ・フォーラム「住まい・地域・暮らし」

☆はじめに—自己紹介を兼ねて

（石東）ここ数年、高齢社会の住宅やまちづくりに取り組んできた。震災で、従来のまちづくりが、いかに元気な若者に合わせたものだったかが露呈した。緑が延焼を防いだこともあり、今は「自然に優しい」ことが「人間にも優しい」ことだと確信している。

（大崎）介護や子育てのサポートをする女たちの会社を作って活動している。福祉の分野も、女性たちの無償労働に頼るのでなく、経済を循環させる必要を感じている。

（弘本）十年ほど住宅建築誌の編集を手掛ける中で、人と住まいの関わりに関心を持ち、研究するようになった。人が暮らすことも、一種の表現活動だと思う。震災で住まいを失ったときクライシス・アイデンティティーに陥った。

☆コレクティブ・ハウジングの提案

（石東）仮設住宅で孤独死や自殺が続いていることに胸が痛む。ふれあいの中で生きる気力を引き出すために「コレクティブ・ハウジング」を提案したい。これは個人のプライベートスペースを一割程度出してもらって、厨房や食堂、談話室、洗濯室などの共有スペースを作るもの。各自の部屋にも簡単なキッチンやバス・トイレがあってプライバシーは守られているが、ときには共有スペースで「大家族のように集まって食べる」ことができる。合理的で、安心で、何より集まって住むことで得られる楽しさがある。もともとは女性の社会進出が盛んな北欧から来た考え方だが、日本の下町にも通じるものがある。住宅構造というより、どんな暮らし方をするかというライフスタイルの問題でもある。

（弘本）震災で、社会的な住宅の意味を考えさせられた。日本の住宅政策は、すべての人を救済でき

ない。たまたま貧しい人が被害にあったのではなく、年月が経てば、どんな家も「老朽化住宅」になる。私も震災で借りていたアパートが全壊したが、女性の一人暮らしは、本当に住む所がない。良い賃貸が無いから、ますます持ち家志向に拍車がかかる。コレクティブ・ハウスは、若者にとっても経済的に自立して住む良い住まい方だと思う。

☆地域福祉——何かを始めよう

（大崎）震災時には、ふだんはなんとか自活できるが非常時には動きが取れない人が、見過ごされてしまった。家族の介護に限界があることも、ヘルパーの数が足りないことも、震災前から分かり切っていたことなのに、改善を求める声が反映されなかったのが悔しい。

震災で女性をめぐる状況の厳しさが明らかになったが、黙っていては落ち込むばかり。宝塚では「震災と女性」フォーラムを開き、バザーやシンポジウムなど自分たちで問題を探る催しを行ったところ、何が問題でどうすれば良いのかが見えてきた。

（石東）私も、具体的に動こう—ということで「コレクティブハウジング事業推進応援団」を作り、団長を名乗っている。今後の公営住宅には是非、コレクティブを取り入れて欲しいし、今の仮設住宅についても、例えば段差解消と兼ねて、向かいの棟と廊下をつないでしまえば、ベランダを兼ねたコミュニティースペースになる。空き部屋があれば、共同の洗濯室や集会所にすればよい。一家に一戸ずつ洗濯機を揃えるより、よほど環境に優しい暮らしができる。仮設にいる間に、コレクティブに暮らすためのトレーニングを積んでおくことが大切だ。

☆まちづくりへの提言

（弘本）「生きる」ことは風景をつくっていくこと。震災で失ったものを、いかに創造的に取り戻すかが課題だ。そのときに、大事なのは自分の利便性だけでなく、昔ながらの知恵や精神文化を大事にしながら、全体との調和を考えること。例えば、クーラーをつければ物理的には涼しいが、金魚を見ることは精神的な涼しさだ。日傘を差せば自分だけでなく、他人にも清涼感を与えることができるかもしれない。金魚を涼しいと感じる精神的な豊かさを、風景に変えてゆくことがまちづくりの基本だと思う。

（大崎）震災同居も長期間になると、あちことで破たんをきたす。家族願望が強かったお年寄りも、理想と現実が違ふことに気付き始めた。現実をきちんと捕らえたうえで、個々が幸せになる方法を見出していきたい。

第1分科会

「住まいと人」

助言者・弘本 由香里

家の建て替えを考えている人や高齢者問題の研究者、建築家、復興住宅担当の行政職員らが集まり、住まいが人に与える影響や、日本の風土に合った家とはなにか—について話し合いました。

まず、震災など自分の意思と反する形で家を失うと、周囲が考えている以上に喪失感が深く、とりわけ高齢者にとっては大きなダメージを与えることが報告されました。震災後、個性のないプレハブ住宅ばかりが建つことに対して、まちの記憶が失われていくようだが寂しい、という声もありました。

本来は「人が住まいを作る」はずなのに、いつの間にか「できあいの家に人が合わせる」形になっています。日本の文化・風土と「住宅」との間にできてしまった距離を詰めなければ、との意見も出ました。

また「女性は住まいに対して具体的に要望を出すが、男性は抽象的すぎる」という指摘も。これは男性にとっては職場が居住空間になっており、家は「寝に帰る」だけの場所であることが原因と思われる、住まいの話から働き方、ライフスタイルにまで話題が広がりました。

第2分科会

「地域と人」

助言者・渡辺 和美

保健婦や看護婦、心のケアを実践している人たちが集まり、震災後の近所づきあいの難しさや地域のメンタルケアの課題が話されました。

医療班やボランティアの調整を行った保健婦さんは「よその地域から来る人は滞在日数が限られていることもあり、心の傷をほじくりだそうとする。長く、地域にかかわれるチームの必要性を強く感じた」と話されました。

また、ボランティアをする立場の難しさも話題になり「うちは大丈夫だったので、近所の困っている人に『よかったら家へ来て』と呼び掛けたが、日頃のつきあいがないせいか断られた」という報告や「ゲストハウスを家をなくした人に提供したが、7カ月後、不便に耐えられなくなり『出ていって欲しい』と言わざるを得なかった。自分の生活を犠牲にした善意は続かない」との声も。

現在、多くの『脱落者』を出す「復興」の在り方が問題になっていますが、地域をなくしてしまった人の心の傷にもっと関心が払われるべきではないでしょうか。

第3分科会

「暮らしを支え合うネットワーク」

助言者・大崎 洋子

参加者は農家の長女、子どものいない退職後の主婦、行政に近い第三セクターで働いている女性、子育て中の共働き主婦、子育てを終えた共働き女性、仕事をしながら親の介護をしている女性など多岐にわたる立場の人たちでした。それぞれに震災後、生活に変化があり、自分のかかえる問題を相談したり、他の人たち情報を得たいという気持ちからフォーラムに参加したが多かったです。

特に娘として老齢の親の介護をしている女性からは、その厳しい状況と同時に日常の生活の大切さ、暮らしを助け合う仲間がどれだけ必要であるかが語られました。震災後、自分自身の老後の生活も視点に入れて、実際に地域でどのような暮らしをしたらよいか模索しているとのこと。

今後どうしたらよいか、(1) 行政にどんどん相談や要求をしていく——しかし行政の窓口は細分化されていて、すぐに適切な所へ行き当たらないし、他とネットワークしていないことが多い。(2) 行政は民間レベルの情報も網羅してほしい——すぐには無理なら、「ユイ」のこのような集まりをもっと頻繁に持って、だれがどのような情報を持っているか分かちあったらよい、という意見が出ました。

第4分科会

「住まいへの提案 コレクティブ・ハウス」

助言者・石東 直子

建築や造園の専門家、被災者向け雑誌やシルバー情報紙の編集者らが参加。パネルディスカッションでも話された石東さんから、コレクティブ・ハウスについて詳しい報告を聞きました。震災で住まいが半壊になった人や、老親と二人でこれからの暮らし方を模索している人、子どものいない女性らがおり「プライバシーを保ちつつ孤独ではない」住まい方に関心が集まりました。

石東さんはスウェーデンの40－80歳代が住むコレクティブ・ハウスの例を紹介。各戸36－76平方メートルでバス・トイレもついており、13%ずつを供出して厨房、食堂、選択室やサウナ、トランクルームなどを設け、平日は共同炊事をしているそうです。

日本ではまだ先駆的な分譲マンションでコレクティブ的な取り組みが始まったばかりですが、北欧では公の住宅公社の賃貸住宅にも取り入れられているとか。兵庫県では復興住宅で一部コレクティブ的な試みを取り入れるそうで、お年寄りたちが安心して、楽しく暮らせるアイデアとして広まりそうです。

第5分科会

「人の間を育てる情報」

助言者・尼川 洋子

発言メモ

- ・震災後、職場で大変な忙しさ、働きづめの後、ブツツンと考え方が変化した人が恋しく、いろいろな会に参加している。生き方が変わったことを実感している。
- ・自分自身が元気を失っていくのに気がついた。情報は待っていないで、積極的に取りに行き、自分も発信したい。
- ・被災し、近所では16人が亡くなった。避難所から仮設住宅へ。仮設住宅の悲惨さは住んでみないとわからない。住人の60%が老人。一軒一軒、聞き書きをしている。決して外には出ない問題がいっぱいあった。
- ・ひとりひとり重荷を背負っている。マスコミでは伝わっていないし、どんどん忘れられていく。
- ・見えない震災、人の気持ちの違いを伝えたい。
- ・人と人がしゃべり合う大切さ。地震後電話が通じず、近所の人とよく話した

1995年1月17日午前5時45分

それからの私

地震が起こった1995年1月17日から、15カ月が経ちました。一瞬の出来事が、こんなにも長く、深く、私たちの生活を変えてしまうとは…。この1年余り、心を去来した様々なこと、こと、考えたことを記しておきたいと思います

親しき友へ

田村 房子

阪神大震災から1年あまり、その節には大変御心配いただき、ありがとうございました。暖かい励ましのお言葉がどれほどうれしかったことか。1年経って、その思いはさらに強くなりました。

幸い、我が家は大きな補修に至らず、壁の亀裂や建具の修理を昨年中に終えることができました。しかし、パソコンの買い足し、電話、ファックスの買換え、壊れた本棚はそのまま、あやういバランスの上にとりあえず収納してもらった本の整理も未だにできず、調べ物にあたふたと時間を費やしています。

「これ何、地震？」と悲鳴をあげたあの時、高速道路の転倒、ビルの崩壊、線路の破断など、死者5000人を超える未曾有の大惨事が愛する神戸の街に勃発していたとは思ってもよらないことでした。懐中電灯の薄明かりの中に、無残に散乱したグラスや食器が輝いていたとお話ししましたね。今でも鮮やかに目に浮かびます。それまで関わっていた組織との別れのしるしでもあったようです。

震災当日夜半に電気が通じたとはいえ電話はパンクしてかからず、余震の続く中、一人で過ごした心細さといったら。翌日、飲料水のペットボトル数本と一抱えの電池を携えて帰ってきた息子が、初めて頼もしく見えましたっけ。また、2組の避難客を迎えて共に暮らした2晩は終生忘れえぬ思い出となりました。長いガス不通の期間中、もらい風呂で受けた友情の暖かさ。人は人と共にあってはじめて幸せなのですね。

効率だけで動いてはいけないのではないか。自分が満足するだけでいいのだろうか。正當に評価され、正當に報酬を受けたいと望んではいけないのだろうか。心通う人達と共に働くことができないだろうか。家々の明かりが少なくなった淋しい環境の下、多くの疑問が生まれました。それにこたえるかのように、その頃いただいた電話と手紙の中から、新しい会社が生まれたのです。ほぼ同時にウイメンズ・シンクタンク「ユイ」も発足しました。思いは一つアライアンス。1995年春、こうして小さな船は出港したのです。

たちまち大きな荒波を被り、暴風雨に叩かれ、横揺れの日々が続きましたが、どうにか半島をまわりました。輝く日差し的大海原をめざして、帆をいっぱい張ったところです。まだ転覆の危険は残っていますが、精一杯、神戸の復興と競争していこうと思います。

どうぞ、あなたもお元氣でお過ごし下さい。化粧を落とした神戸の素顔を是非見にきて下さいね。お会いできる日を楽しみにしています。

1年を振り返って

林 まゆみ

震災後一年を振り返って現在の自分を見つめると、決して満足のいく一年では無かった。自宅が一部損傷という比較的軽微な被害であったことから、震災後すぐに地域のボランティア活動や専門家としての調査活動などに入れた。その後はランドスケープの分野でお手伝いができることを模索しながら、まちづくりプランナーとして、或いは専門家ボランティアの一員として少しずつではあるが、復興に役立とうとしてきた。

しかし、この無力感は何なのだろうか思うに、余力のある住民や行政が力をいれている地域や基盤整備における復興ははっきりとこの眼でも確認できるほどに進んでいる。でも一番、力の弱い人々の復興が見えてこないのである。もっと長いスパンで考えなくてはいけないのだろう。しかしその多くの人達が、高齢者であったり、障害や病を持つ人であることを考えると、身につまされるような、苛立ちすら感じてまう。

さらに最近危惧することは、自分自身を含めた震災に対する、風化である。震災後初期の頃から、中央はもちろんのこと、大阪ですらも被災地との温度差があると言われてきた。現在は被災地の中での温度差を感じる。震災が過去のものとなり、新しい生活が軌道に乗っている人また軌道に乗せようとしている人と震災直後の生活がそのまま連続している人々との格差が開く一方のような気がする。自分自身もそうだ。仮設住宅にいる最後の人が住まいを見つけるまで、あの震災直後の人の役に立ちたいという情熱が保てるのか心もとない。

先日ようやく、復興を目指すランドスケープの専門家のネットワークが立ち上げられた。事務局を務めることになった。もう一度初心にかえり、苦しみを分かち合い、喜びを与えあえるようなまちづくりに臨みたい。

ランドスケープ アーキテクチャ

(landscape architecture)

街全体や国土の風致まで含めた景観設計、都市計画のこと。より人間的で美的な都市空間を創出するための総合的応用科学・技術をいう

「imidas'95」

阪神大震災に国家レベルの救済を

陸田 昭子

物事の最悪の事態を想定して、自分自身に引導を渡す悪い癖が、私にはある。

若い頃から、いささかの人生の辛酸を嘗め、身についた哀しい自己防衛術とでもいおうか。しかし、このような生き方にも良いところがあって、今、手にしているもの、そばにあるものは砂上の楼閣のごときもので、その姿がいつ消えるかも知れないと思うと人も物もおしく思えるし、仮に絶望の淵に突き落とされるようなことがあっても立ち直りは早い

だから、この震災の悲惨な状況がもし我が身に起こったなら… と、いつものようにひとつずつ確認しながら、その事態を自分の心に突き付けてみた。家族が目の前でこときれる、自分だけが生き残る、

火災につつまれる家族を残して阿鼻叫喚の中を逃げ惑う、営々と築き上げてきたものが一瞬にして瓦解する、職場と住まいを同時に失う…。

私はこの不条理な事態を受け止められるだろうか…。自信がない。立ち直れるだろうか…。やっぱり自信がない。今回の震災の悲惨な状況は、乏しい私の想像力の範囲を超えて、私の頭と心を混乱さすばかりだ。

あれから一年。そんな人々にこの国はどう接してきたのだろうか。

土地転がしが永遠に続く訳などないとはじめから分かっているのに、住宅金融専門会社の不良債券処理に六千八百五十億円もの税金をつぎ込み、自然災害になす術もなく打ちのめされた何の罪もない個人には関与せずという。今回の震災は日本国家の弱点を露呈させたというのに一地方都市の震災で済ませたいのだろうか。その復興は明日の日本にかかわる問題だという認識はないのだろうか。日本は地震大国であり、五十年以内に東京でも直下型地震が起きる確率が高いというのに…。

日本の政治家が他人の痛みに鈍感な想像力しかない人間の集団だとしたら、国民は不幸この上もない。しかし新しい総理大臣は入院中の母親を見舞う心優しい人だと聞く。阪神間の復興に親身になって取り組んで下さるにちがいない。

そう信じて「ユイ」がリーダーシップをとって、総理大臣に「阪神・淡路大震災の被害者に国家レベルの救済」を訴えた葉書を全国民が出す運動をしてはどうだろうか……。

「明日は我が身」という言葉を死語にはしたくない。

何かやらなければと

尼川 洋子

震災から1年、四季がめぐった。被災地の中で暮していると、周期的に気分がひどく滅入ったり、悲しかったり、身体がだるくて何もする気になれなかったりする日々がある。

地震の被害は空き地としてしか残っていないが、見えなくなった震災の深さが私たちの気持ちを重くする。風景が変わってしまった街を歩くと、何故か身体も心も疲れる。ここに住んでいた人たちは今、どこでどんな生活をしているのだろうか、帰って来れるのだろうか、花が供えてあるこの更地の一家は、…、次々と想いがこみあげてきて、つらくなってくる。

自分の暮らしはもう地震前に戻っているはずなのに、何か心落ちつかない。復興の事業が、被災し、住まいを、予定していた人生設計を失った人たちの所へまで届くのはいつなのか、本当に届くのか、希望を持ち続けられるかどうか、被災地の風景はいつも私をそこへ引き戻す。

振り返ってみれば、この1年、何とよく活動したことか！中川俱子さん、長谷川京子さんとサンドウィッチをほうばりながら、「女は家で水くみばかりで何で男だけで復興プランなのよ！」と怒りまくって、「みんなで集まって話せる会を作ろうよ」と「ユイ」を始めることにしたのは3月8日の国際婦人デーの日のことだった。激震地だった中川さんの家はまだ水もガスもきていなかった。長谷川さんは子どもの保育所が避難所のため閉鎖されていて、姫路の実家へ子ども預けて、岡本から事務所のある元町まで自転車で通ったりしていた。当時灘区の鶴甲に住んでいた私は今では30分でこれる東灘区の本山の中川さん宅に1時間半もかかってたどり着いたのだった。

それが始まりだった。「ユイ」を結成し、会員を募り、隔月にフォーラムを開き、ニュースレターを編集・印刷・発送し、…。12月暮れ近くになって、16年ぶりの自宅の引っ越しをし、その荷物も片づ

けないままに、1月には主宰している「ヒューマン・ネットワークそれいゆ」で『震災から1年たったよね、想いを重ねてコンサート』を企画・開催した。わざわざ忙しさを作りだしていくような、何かに動かずにはいられないような、何ともいいがたい自分の行動だった。

何故、私はこんなに動きまわったのだろうか？と今、考えている。多分、動いて、人と会って、前向きな行動に自分をかりたてていなければ、被災地の見えない震災の重さに自分の気持ちが耐えられなかったのかもしれない。

マラソン選手は次の電柱までとりあえず走ろうと自分を励ますという話を聞いたことがあるが、それに似ているかもしれない。何をどうしていいのかわからない、でも何かしなければという思いにかられた時に出た結論はやれることからやろうこと。

被災地の中で出会いが新しい力を生み出していくのを実感する。震災からの立ち直りにはまだまだ多くの力と長い時間が必要だ。駆り立てられた気持ちを持続可能な活動の力に変えていかなければならない時だと思う。

社会問題としての震災

大崎 洋子

震災以前から、女性たちや暮らしの現場に居続けた人たちの間からは、社会の変化に合わせた街づくりへの期待が高まっていた。

今の家族を代表するように思われている核家族＝夫婦と子どもたち。実態は大きく崩れだし、一人暮らしをする人たちも多い。田舎で暮らす老親、単身赴任する父親、学生時代や会社勤めで一人で暮らす若者たち．．．。

家族やその他、様々なものの形態が変われば必然的に、人々の暮らし方や考え方、そして社会が果たす役割も変わってくる。時代が大きく変わろうとする過渡期の今は、特定の人たち（主に女性）に負担を強いてしまう現在の社会の在り様結果として、同じように弱い立場のお年寄り、障害者、そして子どもたちへと負担やしわ寄せが更に増していくという悪循環を繰り返してしまう。

これらの声が活かされない内に、あの日がやってきた。それぞれが抱え込んでいた沢山の問題（介護、子育て、仕事etc.）、例えば経済活動に参加しなかった女性たちの貧しさ（参加しても賃金が低い）は高齢女性の貧困＝貧困住宅＝震災で崩壊と、他にもたような被災の構図が吹き出し、これらが社会問題であることをみんなが知る機会になった。震災から学び、今後に生かさなければならなくなった人たちの無念さは少しもはれないだろう。誰もが暮らしやすい街づくりは女性やお年寄り、障害を持つ人々、子どもたちに基準を合わせ、男女共生社会を目指すことで実現する。社会の変化に合わせた新しいシステムを生み出していくことは、何もかも混沌としている今の日本の社会から成熟した日本社会へと転換させていく大きな役割を果たす。震災に学んだHyogoこそが先陣を切って、その役割を買ってでるべきではないか。人々はそれを待ち望んでいるのだから。

被災地から離れて暮らして思うこと

弘本 由香里

昨年10月から大阪市内の高層集合住宅団地に暮らし始めました。震災前に住んでいた宝塚市内の木造アパート（全壊）に比べると、バリアフリー、三箇所給湯をはじめ、設計・設備上の性能は格段に向上したことになります。確かに生活を住戸内の起居寝食といった行為だけに分解して考えればとても快適な住まいです

しかし問題は、人の生活や社会というものが、ひとつひとつの住戸の中だけで完結するものではないということです。内部で高度に完結した住戸をたくさん積み重ねたところで、安定的で柔軟性のある生活や社会システム、ましてや地域文化など生まれようがないのです。今、私が、以前暮らしていたアパートや被災地の仮設住宅に比べると遙に性能のよい住戸での暮らしをそれなりに楽しみながらも、どこか無機質に過ぎる閉ざされた空間に漠然とした不安感を拭いきれない理由はそこにあります。

都市に居住していながら、まるで人里離れた山中にでもいるかのような錯覚を覚えることさえあります。けれども山中の暮らしとも決定的に違うのは、住戸外の気配や自然から強度に速断されている点です。仮に山中での独居なら、人との接触が少ないかわりに生態系との一体感が安定をもたらし、ある種の文化を生み出すでしょう。しかし住戸内の性能を追求し、自らをかたく閉ざした巨大な集合住宅は、安定性や柔軟性、社会性や文化性から遠ざかる一方なのです。この閉じた住宅をいかに開くかが、重要な課題です。生態系から、文化から、福祉から、様々なアプローチで、安定的で柔軟な生活や社会システム、地域文化に寄与するネットワーク型の住環境のあり方が求められているのです。

被災地の仮設住宅での孤独死や孤立は決して仮設住宅だけに特有の問題でも、被災地だけの問題でもないのです。そのことを被災地から一歩離れて、一層強く感じています。

震災1年

長谷川 京子

震災から1年余が過ぎた。1月17日を震災記念日とでもするような派手なマスコミの騒ぎも終わり、日本列島は急速に阪神・淡路大震災の記憶を風化させようとしている。しかし被災地の市民生活の再建はなかなか進まない。余力のある人は、国や自治体の援助や震災の教訓を踏まえた新しい社会建設の方針、信頼に足る方針が示されるのを待ちきれず、自力を振り絞って家を再建し、処分し、職を求めて移住し、健気に生活を繋ぐ努力をしている。そして余力のない人は避難所や仮設住宅に明日の展望も見い出せないまま息をひそめて逼塞している。

震災で手ひどい被害を受け、平穏な市民生活がひっくりかえり、すぐ近くの周辺地域が依然殆ど無傷に残っているのに被災のダメージが速やかに吸収されず、救済や復興が遅々として進まない状況を目にした時、私は、「この国はこれまで個人の努力に負い過ぎてきたのではないか」と思った。経済至上主義、和を以て尊しなどと言う社会の運営に疑いを持たずに「勤勉」に働き、額面上の収入・資産額の上昇に喜んでいるうちに、人が生きていくことを保障する社会的装置（安くて良質な住居、社会保障・社会サービスなど）を築くことを怠ってきたと。

果してその後、国・自治体の「復興」方針では、個人の生活再建は自己責任として、その目線から外されてしまった。だから先の思いは、残念ながら今も変わらない。しかし、この土地に生き震災にあって、住まいや収入の途など生活の基盤を奪われた者に何の落ち度があるというのだろうか。そしてこの国の主権は誰にあるのだろうか。生きた人間なら誰もが生活の基盤が切れ間なく保証されることを心強く思うのではないか。この社会に生き、住まう人々の手に、社会のあり方を決める力を取り戻そう。そして

人々の切実な願いが容れられ、人を個人として支える社会を作ることしか、歴史の検証に耐える復興はあり得ない、と思う。

B00K



女だ、男だとこだわりたくないという人は多い。でも、この震災で社会的な男女格差がどれほど身にしみたことか。女がかかえる問題は何も言わなければ無視される。この本は被災地に暮らす女たちが、力をふりしぼって作った本である。マスメディアから流された震災とは違う生身の震災が見えてくる。伝えたいのは震災で浮き彫りになったこの社会の本当の姿。女たちの目は真っ直ぐに問題を見つめ、社会へポジティブフィードバックしようとしている。（尼川）

仮設の暮らし つれづれ

橋本 幸子

はじめに

阪神大震災から1年2カ月、六甲アイランド第6仮設住宅にやってきてから、11カ月がたった。

ここから運河の向こうにある魚崎の町は六甲山を背にして、5月の新緑、真夏の残照、深秋の紅葉と千変に彩られた。その折々に私の郷愁は深まりつ、四季を一巡した。仮設の人々はこの1年間に既に10%の人がこの島を離れ、50戸に余る空き家が出来ている。この4月には子供の入試や進学で更に転出する人が増える筈である。

今年の冬は殊の外、寒さが厳しかった。六甲おろしの寒風が吹きつけて、雪の舞う夜半にはわびしさ

がつつた。私は出るすべのない高齢者と共に平然と居すわってはいるが、ふる里がいよいよ恋しいこの頃である。

太もも米の話

新緑を呼ぶ春の嵐の中を「難民収容所」から仮設に移った翌朝は春眠暁を覚えずの通り熟睡して目が覚めた。

避難所の万年床の上で周囲を気にしながら、官給品のパンをちぎり、ストローで冷たい牛乳を飲むことはもうないんだ、自分の食べるご飯が炊ける、私は歓喜して、まず米をといた。炊き上がって蓋を取るとパッと湯気が上がる。私はこの湯気を顔一杯うけて至福のうれし涙を流した。生きていたんだという実感を大盛りにした「銀飯」を頬ばって満喫する。

初めチョロチョロ／中パッパ／ジュージューいうたら火を引いて／赤子が泣いても蓋取るな／桃栗3年／柿8年／柚子は阿呆で13年／娘18番茶も出花／ハタチになったら臺が立つ／チョンチョン。私の心は踊っていた。

被災した当日、1月17日は一個の握り飯を2人で分けて食べた。食べながら、「米」こそが日本人の命の糧だと認識した。塩味だけで美味しいこんな食品が他にあるだろうか。「米」に祖先の霊が宿っていると思う信仰が私にあって、頂きますと合掌する。私の命はこの神仏に守られているという思いが強い。

さてこの美味しい米の名称は「太もも米」である。山形県酒田市の自称「半農半漁人」で、晴耕雨読を決めこんで素敵な版画を創る人がいる。その人の版画のステッカーが米袋に貼ってあった。その人の名は佐藤隆一さんだが、米の魅力に重ねあわせ、自然の中に生きる農民に感謝と尊敬と親愛と、どれほどの美辞麗句を重ねても及ばない。

戦中戦後、“飢”と背中合わせに生きて、にわか百姓になり米作りの苦勞を体験している私は自分の汗水流した米を見知らぬ被災者に提供するその人に、すばらしく尊い心を見る。私は太もも米を食べながら5kg体重を回復した。太った私の太ももが歩いてゆく。ふりむかないようにして。

いかなごが炊きたい

3月に入ると瀬戸内のいかなご炊きは私の年中行事になっていた。大きな鉄鍋と土鍋を並べて、3日ばかりで10kg近いいかなごを炊き上げる。思うにその意気込みは食味をしてくれる人がいて、自慢になっていたからだ。

仮設はコンロ一つ、まな板の置場もない狭い調理場では炊く気にならない。心わびしい私の炊きたいいかなごの味は貰った人が気の毒がるほど味気ないだろう。銀色に光るいかなごを横目に見ながら、いかなごのくぎ煮の出来る生活は幸福だったんだ、といかなごに教えられた。

失敗した赤飯

5人の孫の末っ子が高校に入学した。義務教育はこの孫で終わりである。“家族揃って飯を食うことは少ない”という息子や娘たちの核家族である。せめて最後の孫の入学祝いに伝統の我が家のしきたりを伝えんと赤飯を作ると約束した。孫からは早速礼を言ってきた。そこで何としても作らなければならない羽目になったが、よくよく考えれば蒸し器も大きな鍋もない。私の得意な“お強”おこわは不可能だ。仕方なく文化鍋で炊きおこわを作ることにした。

米3カップを炊くのが限度の文化鍋に米4カップと煮小豆1カップを入れて、炊き始めた。沸騰しかけると鍋蓋が浮き上がる。必死のおもいで火加減を調節したが、盛り上がった赤飯は芯が出来て、食べら

れたものではなかった。

始めからこの結果になることは予想出来たのに、私の持ち前の何とかなるだろうという安易な判断でやってしまったのだ。私は万事がこうで、“いい加減の人間”で今日までやって過ごしてきたが、不思議なことに後悔はしないように出来ている。被災してからこの傾向はますますひどくなった。仮設の暮らしに“甘えている”。

表彰式に行きました

場所は東京新宿のパークタワーホテル東京ビデオフェスタルの会場はビデオの愛好家で埋まっていた。1月20日、この日は雪だった。

ホームレスの人たちのダンボールの住居を通り抜けて、避難所生活をふと思い出したが、会場の雰囲気には阪神大震災はすでになく、神戸ルックでリュック姿の老教師3人はおのぼりさんである。

審査委員会が特別推薦した阪神大震災の記録ビデオは9本あった。その中に私がヒロインになった「負けてたまるか」が入っていた。これはWeの会の入江先生が企画、楠崎先生が私が被災してから仮設に入居するまでの百日近い避難所生活を収録したものである。

40年も住み慣れた家が一瞬のうちに倒壊し、近所に16人もの死者が出た1月17日の朝。茫然自失し悪夢を見続けているような私が立ち上がったのは、友人のあついおもいの支えがあったからだ。このビデオは私の貴重な自分史の一コマである。

この会場へ藤沢から娘の婿もやってきた。ビデオ制作に協力してくれた娘のつれあいがちょっと頼もしく見えた。又、小学校を卒業してこのかた60年もの間、筆の便りを続けてきた千葉さんも訪ねてくれて、私のビデオの賞もさることながら、この友との出会いが幼い日の記憶を呼び戻し、うれしかった。私が懐古する最高に幸福な時代の友人である。

都市生活生協の大会で私がボランティアに対する私見を述べた時、知人になった平戸君も現れてビデオを見にきたという。彼は早稲田の院生で、私が本当のボランティアを見たときも感じている青年だ。被災して、沢山のひととの出会いがあって慰めや励ましが私の支柱になり、日々、「負けてたまるか」を繰り返し心に刻んだ私は幸福者だと感じている。

中学生って可愛い

1月20日、私は埼玉県入間郡の三芳町立藤久保中学校で1時限の安全教育講師を依頼された。この日は当地でも珍しいという雪で、田園の中にある校舎からは遠くの山が吹雪でかすんで見えた。

事の次第はこうなのだ。Weフォーラムで私の「負けてたまるか」のビデオが披露されて、それを脇屋先生が3年生の生徒さんに見せた。それを見た生徒さんが感想文をお見舞いにくれた。やがて、

やがて、8月15日、終戦記念日が来て50回目ということで、もう半世紀も過ぎたのだナーという思いで、戦中・戦後の記憶を孫たちに書き残そうと思った50年前の中学生の暮らしを知ることもない孫たちの励みになればという意図もあった。この自伝風エッセイを中学へ送ったところ、またまた今度は1年から3年生までの感想文が「負けてたまるか」の表紙をつけて印刷して届いたのである。

私は依頼を受けた時、我が孫中3の権太坊主から連想して、叱りとばさなければならぬほどヤンチャか、でなければ気味の悪いほど生意気か、その両方ともあるか、とかく覚悟を決めて引き受けた。準備万端整えてはいるものの、被災後初めて新幹線に乗った私はおかしいほど緊張していた。

しかし予想はずれ全校生徒3百人たらずの小規模校だから指導が行き届き、玄関に入れば「ようこそ橋本さん」の赤いリボンで迎えられた。神戸の現状を説明するには1時間では足りなくて、十分に実情は

伝えられなかった。地震は確かに天災だ。しかし倒れた家の傍らにちゃんと建って残っている家もあること。被害は人災だと考えていることなどを熱い思いをこめて喋った。
私の話を聞いてくれた生徒さんから百通に余る便りが届く。私は寂しい時はこの子らの便りを出して読む。

「橋本さんはもう73歳のおばあさんなのに、地震にあってもあんなに元気ですごいナーと思いました。早く橋本さんの家が建って、庭に昔のように好きな花が咲くといいナーと思いました」。私は涙ぐみながら、もう一度あの子たちに会いたいと思い、この子たちのために平和に生きようと勇ましい気になる。

不幸が不幸を呼ぶという

避難所から逃げだす思いで仮設へ来て人影の少ない仮設の静寂は思索には恰好の環境だとまず喜んだ。こうしてここでできる仕事を模索した。

仮設の入居者の聞き書きを始めよう。それはこの中に住まなければできない事だ。思いついて早速始めたが、入居者は空々しくて無理、暫く時をおくことにした。やがて震災後初めてのお盆がきて、夏の暑さは殊の外酷しい中で震災犠牲者と戦後50年の節目にあたり、戦争犠牲者の霊を祭るという二重の熱い熱い盆であった。

8月に入ると仮設はほとんど満杯で、老人を優先して入居させたためにやたらと老人が多い。この人たちはみんな戦争と大震災という二重の災害の犠牲者だ。避難所閉鎖で仮設へ移住してきた人たちは来し方の記憶の品々を後生大事に運びこんだ。捨てるに忍びなかったからだ。

連日40度を越す仮設の猛暑の中で、私はまず自分の半世紀伝を書き綴った。戦後まもなく夫は早世し、子育てを終えて老境を独り楽しむ身分になれたのも束の間、千年に一度という地震にあった。因果もここにつきたという想いがする。

9月も半ばを過ぎ、仮設の人と顔馴染みになって、私は聞き書きを再開した。その一人一人の来し方は私の比ではないドラマチックなもので苦労に苦労を重ねた人が何と多いことか。病気がちで入退院を繰り返している93歳の爺ちゃんは連れ合いに死別してから独居暮らしで、震災の時は倒壊した家の下敷きになり、火がせまり、必死に逃げだしたその直後に家は炎に包まれたという。九死に一生を得た老人だが、訪ねてくる人はない。

夫も子もない婆ちゃんは地震で家を失うまでは甥の家で世話になることも出来た。けれど、世話の代価として譲る家を失った今は遠慮があるという。病院で死ねたらよいし、死体は献体の予約がしてあるという。不幸な例は枚挙にいとまがないのである。聞か書きするのがつらくなった。

終わりに

73歳という私の年齢は「制限つきの命」を生きているわけで、この度の震災で生き残り人口島の墓地のような仮設に来て早や11カ月である。大切に余禄の人生を生きたいと切に念じながら、本土に帰れる日はまだ遠い。

ここ六甲アイランドは山を削って、海を埋めて作った島だ。この島が憎いわけではないが、この島を作る英知で防災都市に肩入れすれば、6, 308名の尊い命が守れたのではないか、20万戸に余る家屋の倒壊が防げたのではないか、疑問に思うところである。

資本の“力”は不可能を可能にする。本土と島をつなぐ六甲大橋は昼夜を問わず車が数珠つなぎである。岸壁にはクレーンが並んでいる。震災後早々にこの島は復興し、市場の原理で浮上している。であるの

にと言おうか、であるからと言おうか、被災者は先の見通しもないまま2年の契約期限の折り返し地点にきて、途方に暮れているのである。

国や地方行政は個人補償は出来ないと言う。しかし、今思いきった処置をしなければならない時にきているのだ。救急車のサイレンを1日に何回も聞く。その度に私は仮設の本当の弱者、高齢者の孤独死や自殺を恐れるのだ。大震災で住む家も仕事も奪われた人たちに公的支援を惜しんだら、世界の笑いものにならないか、おかしいと気づかなければならない筈だと私は思うのだが。

もうけ第一主義の経済や自然を壊す大開発至上主義で出来た六甲アイランドの仮設に暮らす羽目になって、何とも矛盾に悩む。自分の皮肉な運命と貧しい人々の暮らしを見据えて、今暫く仮設にあって私のサバイバルを絵詩に託していこうと思っている。

1996・3・21

神戸の避難所問題は人権問題である

——イスタンブールでの「国連人間居住会議」で訴えを——

後藤 安子

国連は、今年6月3日～14日までトルコのイスタンブールで第2回国連人間居住会議（通称HABITAT II）を開催するこれは、1976年カナダのバンクーバーでの第1回国連人間居住会議から20年目にあたる。またこの「HABITAT II」は冷戦以後、リオの地球サミット以来、地球規模の課題で国連が開催してきた一連の世界会議としては今世紀最後のものとなる

途上国を含めて、今日すでに世界人口の半分が都市に住み、2025年には3分の2が都市人口になるという。急速な都市化にともない、貧困の増大と居住環境の悪化がおこっている。一方、農村部では農業の衰退が起こっていて、これが重大な食料不足を生み出している。「HABITAT II」の開催についてはこのような危機的状況がある。

国連は、1978年ケニアのナイロビに国連人間居住センター（UNCHS）を設立したしかしこのセンターは国連加盟国政府に対する技術的なアドバイスや情報・研修を提供するといった程度で、他の国連機関のような明確な役割や任務もなく、しかも加盟国政府の寄附金に依存しているので、存在感のない機関であった。また国連は1987年を「Shelter for the poor（国際居住年）」とし、翌年の国連総会では「Global Strategy for Shelter 2000（2000年にむけての世界戦略）」を採択した。しかしこの間、HABITAT IIをめぐる状況は逆に悪化している。

そこで今回の「HABITAT II」は「Adequate shelter for all（すべての人に適切なシェルターを）」と「Sustainable Human Settlements Development in an Urbanizing World」（都市化する世界における持続可能な人間居住開発）」という2大テーマが設定され、さらに「HABITAT II」に「City Summit」という別名をつけ、地方政府、私企業、NGO、さらにCBO（住民組織）など動員をはかったのである。

これまでの会議では、これまでの人間居住問題に関する各国及び国際的な取り組みを振り返りつつ、多くの課題（都市の貧困問題、都市環境問題、住宅問題、災害など）の解決のため、21世紀に向けた「原則宣言」及び「世界行動計画」（ハビタット・アジェンダ）を策定する予定である。

各国政府には次の事項が求められている。（1）国内委員会の設立（日本では昨年6月、外務省事務次官を委員長として発足している）（2）国別報告書の提出（国土庁を中心にとりまとめ中である）（3）6

つの成功例の提出。

政府間会議では成功例を提出することが求められているが、しかし、阪神・淡路大震災における被害が未だに復旧されないまま、避難所生活を送っている人々が多数存在するという状況が提示されなければならない。

震災1年を経て、今、被災者が切実に求めてやまないのは生活の基盤となる安定した恒久住宅の確保である。避難生活での劣悪な居住環境、仮設住宅供給における誤った政策により、多くの被災者が生活再建の展望をもてず、健康を損ないまた死者が続出している。この現状と経験が恒久住宅建設にあたって生かされなければならない。

そこで政府間会議に先立って、5月30日～6月11日まで開かれる会議に神戸の被災者の一緒に参加して、神戸の現状を訴えようという動きが起きている。

開発計画に住民の声をいかすこと、立ち退き強制しないこと、地域を崩壊させないこと、を訴えなければならないと思う。

出版

震災後、いち早く新しいボランティア組織を作り、多様な活動をひろげていった「助け合いネットワーク」の活動記録が発行されました。臨場感にあふれたすばらしい記録集です。

ザ・ボランティア
神戸からの経過報告

東灘・地域助け合いネットワーク1年の記録

- ◇企画 市民活動地域支援システム研究会・神戸地域委員会
- ◇記録 東灘・地域助け合いネットワーク
- ◇発行 同上
〒658神戸市東灘区住吉東町2-3-28 東灘区役所気付
中庭仮設事務所
電話 (078) 843-4029
FAX (078) 842-2907

◇1996年3月発行

お知らせ

結婚、離婚の境界線
夫婦間暴力シンポジウム

1996年6月29日（土）

PM1：00～PM4：00

神戸弁護士会館講堂

神戸市中央区橘通1-4-3

パネラー 渡辺和子（京都産業大学教授）

川喜田好恵（フェミニストカウンセラー） 他

主催 神戸弁護士会

協力 兵庫県立女性センター

兵庫県婦人相談センター

神戸市生活学習センター

* 一時保育あり（無料、2歳以上）

要電話予約 電話（078）341-7061

お問い合わせ先 同上

阪神大震災被災女性を支える会

呼びかけます！

被災女性にあなたの力を！

かりの住まいとはいえ、そこで今の自分の身をまもり、そこから生活の建てなおしをスタートさせる女性たちを支援していくために、時間の提供、経済的援助、専門家の支援をお願いします

常設電話相談：月曜日PM1-7時

連絡先 電話（078）579-0074

神戸市兵庫区中道通9-7-22 中島方

神戸市宮岩岡住宅を設計して

中川 俱子

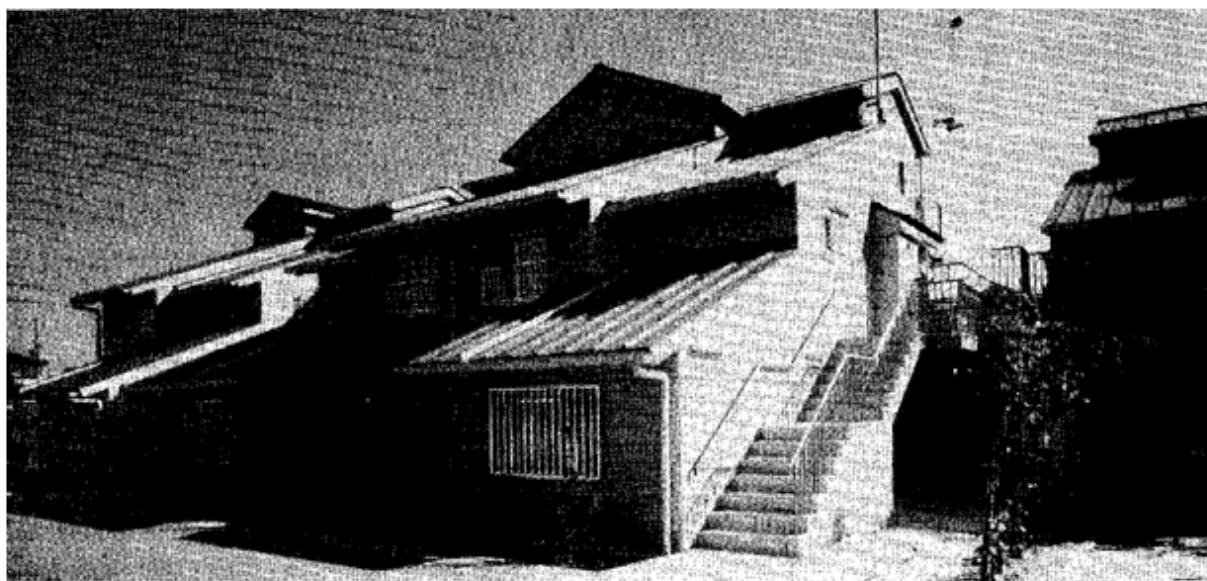


1995年6月に岩岡市宮住宅が完成しました。3月完成予定でしたが、震災のため3カ月遅れの完成でした。

周辺の地域は第1住宅専用地域の静かな2階建の住宅と畑のある、のどかな場所です。そのため、戸建て住宅のような集合住宅を計画することと、1戸に1台の駐車場を設けることが設計条件でした法的規制、日影の検討の結果、3棟24戸の配置を決定しました。中央の広場は残念ながら駐車場です。道路の不法駐車が多いので、集合住宅には各戸に1台の駐車場を設置することを神戸市は条例で決定しています。

1階はフラット、2・3階はメゾネット型の住戸を組み合わせ、2階に上がる階段は中央に設け、路地のような空間を創りました。向こう三軒隣りが挨拶しやすい空間です。西側の住戸は4面外気に面しています。

1階のフラット型は住戸内の段差をなくし、便所、浴室に手すりを付けているので、高齢になっても住みやすい住まいです。2・3階はメゾネット型で、住戸内に3階に昇る階段があります。階段の踏面、蹴上げの寸法も昇りやすい安全な寸法とし、手すりも付けました。屋根の形と合わせた天井の形をしていますので天井高が高く、伸び伸びしています。

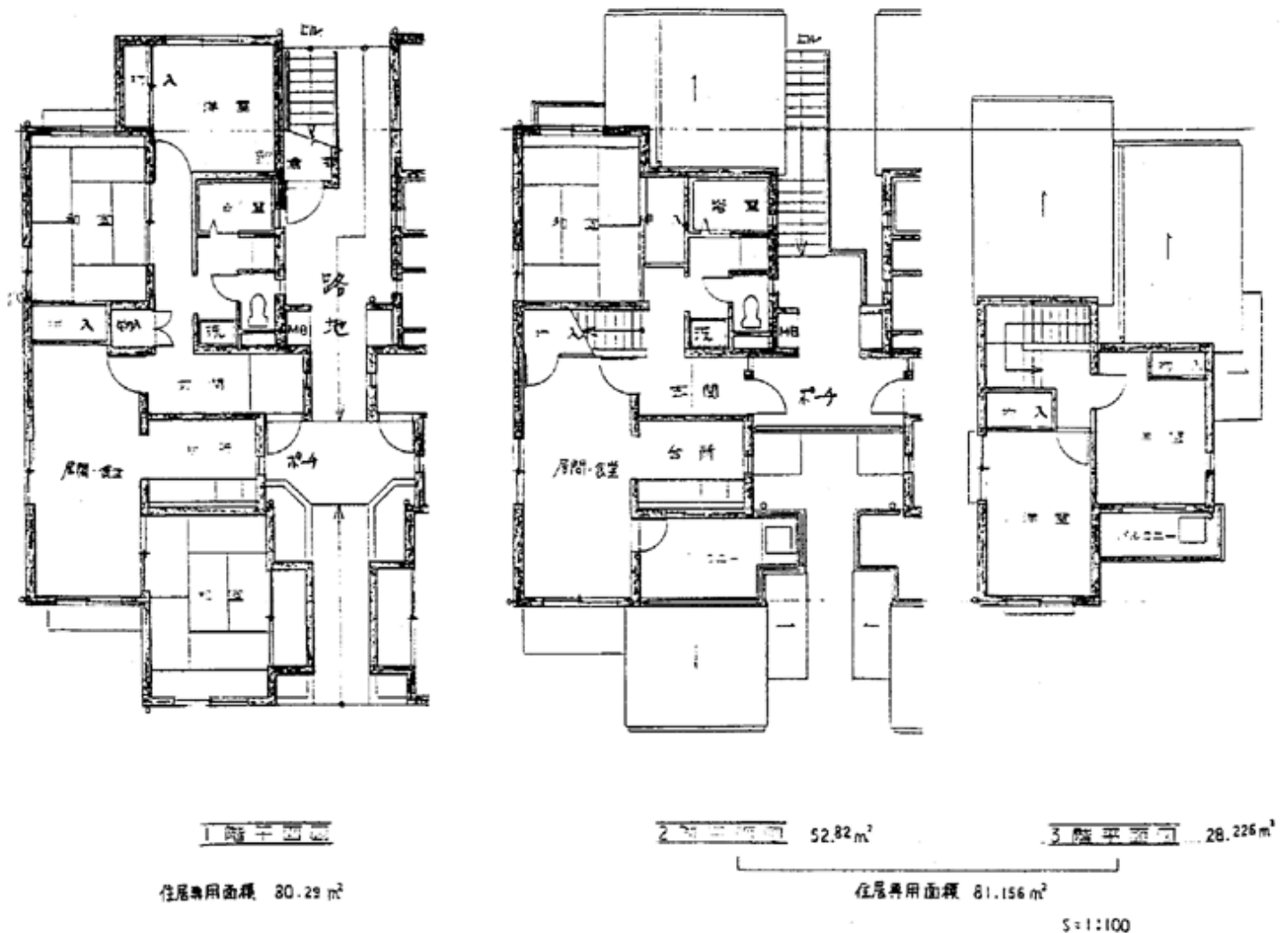


2階の居間の南側には広いバルコニーもあります。冷蔵庫、食器棚が並べやすい半独立型の台所です。

1階のフラット型住戸の専用面積は80.29㎡、2・3階のメゾネット型住戸の専用面積は81.156㎡です。敷地周辺は出来るだけ植栽しました。ブロック塀をやめ、垣根にしてよかったと震災後、特に思っています。完成後、見にいくと周辺の環境と違和感がなく、まわりの風景をさらに豊かなものにしています。

この住宅は、市営住宅と公団住宅の中間層の収入の人達のための市営住宅です。家賃も市営と公団の中間位です。このような公的集合住宅が多く出来れば、私たち勤労者はどんなに助かることでしょう。モデル住宅として、特に建築するのではなく、良い試みであれば次々と建築していく住宅政策にならないものかと思います。高いローンで苦しむよりは、公的住宅に入居の方がメンテナンスも安心です。

震災後、分譲集合住宅の問題点が数多く出てきました。建て替えの困難さが毎日のように新聞紙上に出ています。基本的には集合住宅の分譲は問題が多すぎます。現在建設中の集合住宅が古くなり、建て替え時がどうなるのか将来を考えると不安になります。しかし、勤労者にとって集合住宅しか手にはいる価格の住宅がない現状です。持家政策から、良質な賃貸住宅供給へと、世の中のしくみを変えていく必要があります。



～神戸大学『震災文庫』の収集担当者として

稲葉 洋子

昨年10月30日に一般公開を始めた神戸大学附属図書館『震災文庫』は半年経過した2月23日現在で約3650件の資料数になった。一周年を迎えた1月には大量の図書・雑誌が刊行されたが、その後は出版のペースが落ち、収集担当者としてはけつごう補充や雑誌の記事のピックアップに余力を回せるようになってきた。

しかし、全体をながめるとやはり震災直後の資料の収集割合が非常に少ない。避難所に貼られたチラシやそこで作られた新聞、広報類がまだまだ集まっていない。最近も、復興計画の「案」の「案」が寄せられたが、こんな資料がこんなに早い時期に作られていたのかとびっくりさせられた。

国会図書館でさえ、日本で出た図書の網羅的収集は無理だとわかっているのだが、『震災文庫』を見た人から「たいして集まっていませんね」と言われるとやはりショックである。きっとその人が見たい分野や実際集まっていないのだと思う。市販の図書以外は新聞の記事をもとに寄贈依頼をする方法で収集してきている。だから裏返すと記事にならないと収集からもれることになる。このもれた部分を補ってくれるのが、メディアの報道を見て寄贈してくれる個人や企業の人たちである。初期の頃から継続的に資料を送ってくれる人もいて、こんな協力が一番うれしく、またありがたい。

最近、東京でのある講演で「震災資料をいくつかの図書館が網羅的に集めると看板を掲げているが、収集リストを比較すると重複しているものが案外少ない」という話があったと知人から聞いたが、確かにリストを照合するといつも何点かは初めて見るものがある。しかし、これらの資料は震災前からのつながりを通して収集されたものが多い。大学図書館でいえば、外国資料や学会資料がそれにあたるかもしれない。

寄贈依頼をしていると、よく「そちらにはもう何部も送っていますよ。まだいるんですか」と言われる。分野毎の専門の教官に送られていたり、学部の研究助成室宛だったりして、図書館には依頼しなにかぎり送ってもらえないことが多い以前から大学図書館の資料の一極集中化について、いろいろ議論されているが、まだまだ教官の研究室の資料数の方が図書館より専門的で網羅的ではないだろうか。図書館としては残念なことである。

今、問題になっている町づくり関係の資料も六甲道付近は知り合いの人を通してほとんど網羅的に集まってきているが東灘とか長田地区はニュース類が送られてくる程度である。継続的に資料を送られてくる協力体制、ネットワークを築く必要性にせまられている。

現在『文庫』の利用者は神戸市内より他府県の人の割合が高い。それは一般公開が始まって以来、同じ傾向である。特に関東方面の人の利用が多い。震災後、1年たった今でも関東地区の広報類には阪神・淡路大震災関係や防災関係の記事が多かった。やはり危機感の違いであろうか。

『震災文庫』が目的としている防災や震災の検証、そして復興過程の見直し等様々な研究や教育に役立てるために資料収集作業が急がれる。震災直後の資料の充実、他の震災関係資料収集機関とのネットワーク作りがこれからの課題である

平成7年4月～8年3月

収入の部		支出の部	
年会費	404, 500	会報発行費	180, 703
フォーラム参加費	41, 300	フォーラム運営費	138, 499
パーティ会費	316, 000	パーティ費用	295, 533
元気アップ交付金	150, 000	事務消耗品	7, 484
寄付金	4, 200	会議費	10, 000
収入計	916, 000	支出計	632, 219
		次期繰越金	283, 781
合計	916, 000	合計	916, 000

結・たより発行 ・ ・ VOL1. 4／23 ・ VOL2. 7／31
（発行部数300部） VOL3. 10／23 ・ VOL4, 5 '96／3／30

会員数 ・ ・ ・ 137名 賛助会員 ・ ・ ・ 101名
（'96／3／31現在） 購読会員 ・ ・ ・ 25名
短期購読会員 ・ ・ ・ 11名

フォーラム

§第1回 ・ ・ ・ ・ 「共に生きる、共にささえる町づくりへの提言」
4／23 兵庫県民会館・参加者23名

§第2回 ・ ・ ・ ・ 「ボランティア活動を町に根づかせる」
6／24 兵庫県立のじぎく会館・参加者13名

§第3回 ・ ・ ・ ・ 「女性たちの発言、住まい・暮らし・地域」
12／2 神戸生活学習センター・参加者53名

パーティ ・ ・ ・ ・ 8／26 平生記念館・参加者40名

忘年会 ・ ・ ・ ・ 12／2 チサンホテル・参加者39名

ヒューマンなまちづくりを！女性の視点を表現する
ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」

☆1996年の活動は

あの未曾有の阪神・淡路大震災から一年余りが過ぎました。思ってもみなかった出来事で私たちの生活は大きく変化しました。被災地の風景は一見落ちつきを取り戻したかのようにも見えますが、まだ住居や生活そのものの再建もままならないでとり残されていく人々が大勢います。復興の中で地域の力の差も目につくようになりました。見えない震災は今もなお続いています。

私たちは昨年1年間、人間らしく、安心して住める豊かなまちづくりをめざしてこれまで培ってきた女性たちのネットワークを活かしながら、フォーラムを開催しそれぞれの思いを出し合い、問題を社会の中に明らかにしていく活動に取り組んできました。女性たちの思いと知恵を集めて、社会にむけて表現していくシンクタンク“知恵の芽”の活動の始まりでもありました。

1996年度はそれをもう少し具体化して、「女性たちの提言集」にまとめていきたいと考えています。経済効率優先の復興、ハード優先の復興でなく、女性たちの多様な視点を大切に一冊の本を編みたいと思います。

活動内容

- * ヒューマンなまちづくりに必要な情報の収集と提供
- * 各界で働く女性、専門家のネットワークづくり
- * 学習会、交流会の開催
- * 「提言集」の発行

活動のモットー

ゆるやかに 楽しく 元気に

賛助会員、講読会員募集

賛助会員：趣旨に賛同し、活動を支援して頂ける人。会費（年間）3,000円

- * シンクタンク「ユイ」の資源を活用できます
- * ニュースレター（年4回発行）をお送りします
- * フォーラムの案内を差し上げます。参加費無料。

講読会員：ニュースレターを定期講読して頂ける人。会費（年間）2,000円

- * ニュースレター（年4回発行）をお送りします
- * フォーラムの案内を差し上げます。参加費有料。

連絡先

〒658 神戸市東灘区御影町御影字篠坪1383-1 「アルプラン」内
ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」 FAX (078) 822-4141

ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」運営スタッフ

中川俱子（建築家）

長谷川京子（弁護士）
尼川洋子（情報コーディネーター）
安達和美（短大教員）
相川康子（新聞記者）
田村房子（翻訳者）
林まゆみ（ランドスケーププランナー）
陸田昭子（企業広報担当）

運営スタッフだより

●お花見が好きで毎年出掛けます。今年は京都の伏見へ行ってきました。勧修寺は、参道の築地塀に艶やかな紅枝垂れ桜が映え、境内の池に映るソメイヨシノの楚々とした風情が去り難い、人影も疎らな静かな寺です。

太閤秀吉の花見の宴で有名な醍醐寺では、桜のトンネルや、何本もの杖を貰いながらも、見上げるような高さから一気に地を這うように枝垂れる健気な桜に感嘆の声しきり、人波の絶えない境内の賑わいはさすがです。

このところ公私とも多忙。物忘れもやや少なくなり、「小人閑居して老化を早める」を実感しています。（陸田昭子）

●「忙」しいという字は“心が亡くなる”と書きます。2月～4月はどうしても忙しく、「結・たより」の発行が遅れに遅れました。申し訳ありません。

ゆるやかに、楽しく、元気に、持続可能な活動を模索したいと思います。私の今のキーワードは“味わう”です。食べ物も生活も時間も、そして人と人の関係も。（尼川洋子）